

目的 中学校技術・家庭科において「相互乗り入れ」が実施されているが、男子の家庭系列乗り入れについては、領域・教材の選定、指導方法、履修形態など、まだ模索の段階である。そこで、大阪府下で男子の乗り入れ領域として最も多い食物領域について、男女生徒の学習反応・学習行動を検討することにより、今後の男女共学のあり方を検討することにした。

方法 大阪府下の某中学校1年生(男子169名、女子195名、計364名)に、1982年4月から7月、調理実習に関する意識調査及び授業分析を行った。実習教材として、マドレーヌ、手打ちうどん、カレーライスを研究対象とし、学習形態は男女混合グループ、男女別グループとした。

まとめ 調査結果から、学習前・学習後とも実習教材についての知識は女子が高いことがわかった。また、男子のマドレーヌに対する関心・経験がとくに低かった。

授業分析の結果、男子グループは手打ちうどん、女子グループはマドレーヌについての学習能率がよく、混合グループは全体的に能率がよくなかった。男子はとくに手打ちうどんの学習に積極性がみられ、混合グループより男子グループに積極性がみられた。女子はどの教材に対しても積極的で、学習形態による差はみられなかった。

中学校における調理実習の場合、男女のグループ編成のしかたが学習に対する積極性や能率に影響を与えることが今回の研究で確認できたので、学習行動に現れる性差をさらに追求し、男子生徒の家庭科学習のあり方を考えてみたい。